

チ ヤ

(黒ボク土)

〔土壤肥料〕

施肥管理技術のポイントは、品質・収量を低下させずに窒素施用量を削減し、施肥窒素の系外流失量を減らすことである。そのためには、養分吸収特性に適合した施肥を行うことが必要である。具体的には、きめ細かな分施、硝酸化抑制剤による溶脱防止、溶出パターン異なる肥料の組み合わせ、などが有効である。分施にするか、肥効調節型肥料にするかは、施肥労力と肥料コストとの兼ね合いとなる。敷わら、敷草は、土壌の乾燥、肥料の流亡の防止、地力の維持、土壌の物理性改善、雑草発生の防止、地温の調節、養分の補給など、多様な効果が期待できるので、堆肥施用とともに是非とも実行したい技術である。

施肥位置については、灌水チューブによる樹冠下施肥、灌注による深層施肥なども肥料の利用率を高めるものと思われる。

〔病害虫・雑草防除〕

圃場の管理状況が病害虫や雑草の発生に大きく影響する。管理を誤るとダニ類、カイガラムシ類や炭疽病等の発生が助長されるので、適切な整枝剪定を行い、罹病部や害虫寄生部を除去するとともに通風・採光を良好に保つ。二番茶不摘採園でも次年の病害虫密度を低下させるために十分な管理を行うことが大切である。改植に当たっては健全な苗木を植え、白紋羽病、カイガラムシ類等を圃場に持ち込まない。病害虫の防除スケジュールを作成し、適期にフェロモン剤やBT剤を使用し、殺虫剤の使用を低減する。周辺雑草はウスミドリカスミガメ等の生息場所となるので、機械等の手段で除草し、除草剤を削減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
有機質資材 施用技術	土壌診断に基づいた低成分含量堆肥(稲わら堆肥及び落葉堆肥等で、窒素、カリ含量が1%以下の完熟したもの)の施用を基本とする。 肥料成分含量の高い畜産系堆肥の施用にあたっては長期的な視点にたった投入量管理を行う。	堆肥 1~2t/10a
化学肥料 低減技術	畝間に条施、あるいは土壌と混和する。 肥効調節型肥料と速効性肥料とを組み合わせ、養分吸収特性に対応した施肥成分の供給を行う。 有機質肥料による施肥を行う。	分量で施肥基準 以下 有機質肥料併用の 場合には化学肥料 低減率20~50%
化学農薬 低減技術	機械除草を行う。 BT剤をローテーション散布に位置づける。 (対象:ハマキガ類、チャノホソガなど) 微生物農薬を利用する。 (対象:ハマキ類) 性フェロモン剤により交尾阻害を図る。 (対象:チャハマキ、チャノコカクモンハマキ)	慣行使用回数の 20%減
その他の 留意事項	成園における有機物資材の施用は、畝間に溝施用することを基本とする。	